

省力化技術で実現する大規模経営 ～作業負担の少ないバラ生産を目指して～

稲沢市 友松 正さん
施設花き（バラ）

【平成 26 年 2 月 18 日掲載】

稲沢市でバラの切り花生産を行う友松さんを紹介します。友松さんは、家族経営という限られた労働力のなかで規模を拡大するため、積極的に省力化技術を導入してきました。平成24年には、農業電化による効率的な経営や省エネルギー技術の向上・改善に対する功績から、（社）農業電化協会主催の農業電化推進コンクールにおいて農林水産省生産局長賞を受賞されています。

営業マンからバラ生産者へ

スポーツメーカーの社員として全国各地を飛び回っていた友松さんですが、多くの農家長男と同じように自分の運命として、30歳を目前に就農を決意します。やるからには需要のあるものを始めようと、早朝の市場を訪れ、何が売れているか独自に調査したそうです。また、友松さんは、天候による栽培面でのリスクを減らすため、施設の利用を前提に導入作目を模索します。それらの結果、昭和60年当時、成長産業であったブライダル業界からも安定した需要のあった「バラ」を栽培作目とします。



友松 正さん



大部分のほ場が一箇所にまとまっており、効率的な管理が可能

研修を受けずに就農した友松さんでしたが、「足を向けて寝れない」と表現する近隣の生産者からの適切なアドバイスもあり、初年度からなんとか経営を軌道に乗せることができました。

当初は540㎡で始めたバラ栽培でしたが、市場の需要にまだまだ生産量が追いついていないと判断した友松さんは、4年後の昭和63年に1,000㎡のハウスを建設したのを皮切りに、平成4、5、9年と増設し、現在の4,600㎡にまで規模を拡大させます。

健康があつてこそ

「健康があつてこそ農業を続けられる」と語るように、友松さんは規模拡大と同時に、作業負担の軽減にも力を入れてきました。特に平成4年以降に建設した施設には、農薬散布による身体への作業負担を減らすため、当時は県内ではまだ珍しかった自走式防除機を導入します。これにより10a当たり半日を要した農薬散布が、ハウスに入ることなく30分で済むようになりました。



省力化に大きく貢献する設備
左：自走式防除機
右：内張りの自動カーテン

また平成17年には、高設ベンチを導入し、養液栽培を取り入れることで、施肥作業の省力化と作業姿勢の改善により大幅な作業負担軽減を実現しました。

環境制御による収量増加対策

友松さんは、「(家族で) やれる範囲でやろう」と従業員を雇っての規模拡大については考えていません。そのため、現在は今の経営規模で最大限の収益を確保するため、施設内環境の改善による収量増加対策に取り組んでいます。ヒートポンプと除湿機を導入して温湿度を制御することにより病気の発生を減少させたり、冬季に炭酸ガス発生器と常温煙霧器を利用して二酸化炭素濃度と湿度を高めることにより、収量の増加を実現したそうです。今後は、ドライミストを利用した増収効果を検討していくそうです。



高度な環境制御を実現する機器
左：ヒートポンプ
中：炭酸ガス発生器、右：除湿機

国内クレジットを通じたエコへの取組

「農業をしながら、何か環境保全に役立つことができれば」と考えていた友松さんは、平成23年からヒートポンプを導入することにより削減されたCO₂排出量をクレジットとして民間企業へ売却する「国内クレジット制度」に参加しています。これにより友松さんがバラ生産の中で削減したCO₂排出量が地元印刷会社の排出削減の取組（カーボンオフセット）に利用されています。また、友松さんは、農家と企業間の環境活動の輪が広がることを願って、カーボンオフセットPRイベントに自園のバラを提供し、印刷会社の取組を応援しています。

「花育」を通して

友松さんは、地元小学校の6年生が卒業式の際に保護者に送るバラを提供しています。この取組は「花育」という言葉がまだ一般的でない20年前から行われており、植物に触れる機会の少ない生徒たちに直接バラを収穫してもらうとともに、保護者への感謝の気持ちを伝えてほしいと始めたものです。



県内では友松さんだけが栽培する
イングリッシュローズ
‘ジュビリー・セレブレーション’

「街で自分に会ったら、必ず挨拶をしてほしい」これは、友松さんが生徒たちと最後に交わす約束です。「地域の中で一緒に暮らしていく以上、挨拶を交わせる関係でいたい」とその理由を語ってくれました。

将来の消費者を育てるだけでなく、自ら育てるバラを通じて地域のつながりを考える友松さんに「花育」の本当の意味を教えてもらいました。

執筆：農業経営課

取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課 稲沢駐在室